

橘会 入社式

2014年4月1日(火) 医療法人橘会の入社式を開催いたしました。
昨年度に引き続き、医師、看護師、セラピスト、事務員と総勢86名の職員が入社し、活気あふれる入社式となりました。



田中院長就任祝賀会

2014年4月19日(土)に田中院長の就任祝賀会を行いました。場所は、阿倍野ハルカスの20階、大阪 Marriott 都ホテル。夜景を見渡せる豪華な会場でした。

出席者からの祝辞などの後に、田中院長からの挨拶がありました。挨拶では、地域医療にかける想いをオーケストラに例えられ、クラシック音楽好きの先生らしいメッセージで印象的でした。

2014年度東住吉森本病院、新体制で更にパワーアップして参ります！



編集後記

広報室 M

年に4回ほど近くの教会でパイオルガンの公開演奏会が開かれるんです。

バロック音楽が好きなので(クリスチャンでもないのですが)ほぼレギュラー参加しております。この日は、たまたま奏者の方が鍵盤を見せてくれるということで畏れ多くも演奏ブースへ入れていただきました。

そこで驚いたのですが、意外に鍵盤数が少ない!!! 56鍵しかないのですが、2段鍵盤構造でペダルなどもあるので十分演奏に耐えうる音域が確保できるんだそうです。色々説明を聞きましたが、もうこれ、楽器というより建築物なイメージでした(笑)。



*東住吉森本病院のホームページでも情報が日々更新されております。 <http://www.tachibana-med.or.jp>



平成26年 新年度を迎えて

昨年10月に院長を拝命し半年余りが経過いたしました。様々な業務に追われる毎日でしたが、皆様のご支援のお陰で新たな体制で平成26年度を迎えることができましたことを心より感謝申し上げます。特に、副院長に仲川浩一郎先生、地域医療連携センター長に辻口幸之助先生にご就任いただき、救急・総合診療センターに廣橋一裕先生と大野城太郎先生をお迎えするなど、力強い布陣となりました。これまで以上に地域の皆様へ信頼いただける病院を目指して頑張りますので、今後ともご支援下さいますようよろしくお願い申し上げます。

平成26年4月 院長 田中 宏

副院長 御挨拶

私は医師となつてから25年が経ちますが、故森本議会議長の病院理念に共鳴して当院に入職してから18年が経過しました。主に内視鏡を専門とした内科診療に携わり、「苦痛のない内視鏡検査」を目指して他病院に先駆けて鎮静下内視鏡や経鼻内視鏡を導入し、地域の先生方の御紹介のお陰もありまして、年間検査数7800件に達するまでとなりました。

その間 宮城先生・大森先生・金先生に御指導頂きましたが、4年前からは数増部長との両輪体制に替わり、お互いに支え合いながら、消化器内科の歴史と伝統を何とか守りつつ現在に至っています。

この度 副院長を拝命致しましたが、これも御指導頂いた諸先輩方ならびに私を支えて下さる多くの職員のお陰であると感謝しております。今後は 地域の先生方や皆様方に貢献する立場として、また田中院長を補佐する立場として、今まで以上に「地域に根ざした病院」を目標に励んで参りたいと思っております。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。



副院長 仲川 浩一郎

地域医療連携センター長 御挨拶

2014年3月1日付で、新しく創設されました地域医療連携センター長を拝命いたしました辻口幸之助です。地域医療連携センター長という大役を仰せつかり、身が引き締まる思いです。

当センターは、当院を希望される患者様がスムーズに受診できるように、また当院の診療を終えた患者様が無理なく他院へ移ることができるよう、幅広い医療連携を実現するため組織されました。

今後は病病連携、病診連携をさらに密にし、紹介から入院まで、そして治療後の転院あるいは在宅まで、切れ目なく円滑な医療連携が実施できるように全力で取り組んで行く所存です。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



地域医療連携センター長 辻口 幸之助

救急・総合診療センターのご紹介

救急・総合診療センター 部長 池邊 孝

当科は救急・総合診療部から、本年度より、救急・総合診療センターと名称変更致しました。新しくなった当センターに、専従医として大野城太郎先生を、そして顧問に廣橋一裕先生をお迎えしました。おふたりをお迎えして、診療のみならず、学術的にもより充実した救急医療が展開できるものと確信致します。

さて、当センターでは「断らない救急」を理念として、日々診療に当たっています。症例は、感冒から骨折、消化管出血、腸閉塞、急性心筋梗塞、大動脈解離、くも膜下出血など多岐にわたります。

救急車の受け入れ台数は、年間約 5,000 台、独歩患者は、年間約 13,000 人と地域随一の受け入れ件数となっています。重症の区別なく患者を受け入れ、次から次へ患者を診ることで、研修医には経験値を上げるまたとない機会となっています。他科の医師へのコンサルトを通じて礼儀とコミュニケーション能力を、頻回の症例検討会により、知識だけでなく人前で要領よく話す技術と度胸を身につける、すなわち、実践的な「使える医師」となるよう教育しています。研修医教育にも一層力を入れ、全国から研修医はじめ若い医師が集まる ER を目指したいと思っております。



着任の御挨拶

救急・総合診療センター 顧問 廣橋 一裕

私は 1974 年に大阪市立大学医学部を卒業し、大阪市立大学医学部第 2 外科に入局しました。医師になって 40 年が過ぎましたが、最初の 30 年間は外科医として、その後の 10 年間は医学教育・総合診療に従事しました。

東住吉森本病院には 1980 年に駆け出しの外科医として 1 年間お世話になりました。病床数が 54 床から 220 床に増えた時でした。その後肝臓外科に携わっていましたので、東住吉森本病院でしばしば肝切除のお手伝いをさせていただきました。医学教育・総合診療に異動になった 2004 年、東住吉森本病院の病床数が 329 床になり、病院が現在地に移転した時でした。東住吉森本病院の節目ごとにかかわっており、つながりを感じているところです。

2014 年 3 月に大阪市立大学を定年退職し、4 月から救急・総合診療センター顧問として東住吉森本病院にお世話になっています。臓器別専門医は「深さ」を求めますが、総合診療医は「扱う問題の広さと多様性」が特徴であり、地域を診る視点も大切です。プライマリ・ケア教育では、多職種間連携を意識し、「Teaching is learning」を基本とした教育・研修体制を目指しています。今後「地域に貢献できる若手医師の育成」をキーワードに精進するつもりですので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。



着任の御挨拶

救急・総合診療センター 部長 大野 城太郎

はじめまして。私は昭和 63 年奈良県立医科大学を卒業しました。

卒業当時、西日本で総合内科を標榜しているのは、沖縄県立中部病院か、市立舞鶴市民病院しかなかったため、家庭の事情もあり、舞鶴で総合内科と救急医学の研修を受けました。そこにはカナダ人医師 G.C. Willis 先生が教育専従医師として招聘されていました。

その先生が私の医師としてのロールモデルとなり、内科全般、感染症、救急に関して欧米医学を叩き込まれました。その後、京都大学医学部総合診療科に入局し、研修医教育や総合内科医としての臨床を実践しておりました。京都大学医学部附属病院を皮切りに、神戸市立中央市民病院、市立島田市民病院、大阪赤十字病院と、京大関連病院を転勤しておりました。その間、オーストラリア NewCastle 臨床疫学大学院で臨床疫学修士、London 大学感染症大学院修士課程を修了しました（通信教育）。



そしてこのたび、廣橋教授の御縁で当院に勤務させて頂く事となりました。入社して一番の驚きは、病院単位で良い感じの和がしっかり出来ている事です。そこに自分がどう絡めば良いのだろうか？私の専門は、感染症、総合内科、救急です。私の立ち位置をどうすればよいのか悩みました。結論は出ていませんが、暫定的な方針は、感染症でいえば、シナジー効果を目指す事です。シナジーとは、1 抗菌薬 + 1 抗菌薬の効果が 2 以上になることです。自分の単独プレーは禁止。特に ICT を通じて、コミュニケーションをしっかりと取りながら、周囲の皆様と、どんどんシナジーしてゆきたいです。そして、皆様のお力を拝借しながら、その部署に所属する人数の数倍分の力を発揮する触媒のような働きが少しでもできればと考えています。試行錯誤が続きますが、何とぞよろしくお願ひ申し上げます。

第 7 回 東住吉内視鏡ネットワークカンファレンス

開催日：2014 年 3 月 8 日（土） 16:00 ~ 18:00

場 所：ホテルモントレグラスミア大阪

21 階 『ラベンダー』

【講演】 座長：東住吉森本病院

内科部長 藪崎 恒夫先生

①「ヘリコバクターピロリ感染症 最近の話題」

東住吉森本病院 内科 上村 理沙先生

②「コーラ溶解療法と内視鏡スネア碎石法の併用で治療した残胃胃石の 1 例」

東住吉森本病院 内科医長 堀田 潔先生

③「当院における鼠径ヘルニアの内視鏡的手術

～ 腹腔鏡下ヘルニア修復術 (TAPP) ～」

東住吉森本病院 外科医長 酒部 克先生

【特別講演】 座長：東住吉森本病院

副院長 仲川 浩一郎先生

「抗血栓薬新ガイドラインの使用経験」

講師：大阪市立大学大学院医学研究科

消化器内科学 斯波 将次先生

閉会の辞 東住吉森本病院

院長 田中 宏先生

